

# ヘーゲル論理学の「客観（性）」概念について

山内 清

## On the “Object(Objectivity)” Conception in Hegel’s “Logic”

Kiyoshi Yamauchi

(Received on Dec. 7, 2015)

### Abstract

In this paper, I analyze Hegel’s “Object(Objectivity)” conception. Hegel has “Allgemeinheit—Besonderheit—Einzelheit” Schema and “an sich—für sich—an und für sich” Schema. I analyzed both schema in the preceding numbers of this bulletin. This paper is a sequel of my studies.

There are difficulties on the occasion that the chemical relation transfers into the purposeful relation in Hegel’s “objective conception”. I conclude that Hegel transfers “subjectivity” conception into “objectivity” conception by means of using double meaning of “object” term. The term “Objekt” in German philosophy means both “objective things” and “subjective purpose”. I estimate that Hegel tides over logical difficulties.

キーワード：ヘーゲル、『精神現象学』、主観・客観、『小論理学』、目的的關係

### はじめに——問題の所在

主観と客観の關係は哲学の昔からの大問題である。ヘーゲルは大きくは「主観→客観→（絶対）理念」のトリアーデ構造でこの問題を扱っている。ヘーゲルでは主観も客観も理念の要素であり、その点でいわゆる主客二元論には反対である。『小論理学』192節の口頭説明に次のようにある。「普通の論理学では、推理論とともに、いわゆる原理論をなしている第一部が終わり、これに第二部としていわゆる方法論が続いている、そして方法論において示されるべきものは、原理論で取り扱われた思考 Denken の諸形式を現存する諸客観 Objekte へ適用することによって、いかにして一つの学問的認識が作り出されるかということである。これらの客観がどこから来るか、一般に客観性 Objektivität という觀念 Gedanke はどのようなものなのか、これについては悟性的論理学 [=弁証法を知らない形式論理学——山内] は何の説明も与えない。そこでは思考はたんに主観的 subjektiv で形式的な活動と考えられており、思考に対峙している客観 das Objektive は断固としたもの、独立の存在体 für sich Vorhandenes と考え

られている。しかしこうした二元論は真理ではない。」

二元論を拒否すると、多元論ではあり得ないから一元論ということになる。ではその一元とは何か。主観かそれとも理念か。それとも「主客未分離」の状態か。仮に主客未分離→主客統一の「理念」の一元論だとしても、「理念」は終着点であり、哲学の始元を理念から与えることはできないから、主観と客観のどちらかを始元とするほかはない。ヘーゲル『大論理学』は「客観的論理学」から始まり、『小論理学』の概念論では「主観的觀念」から始まる。その主観は客観で実現されることで主客統一の理念になる。『小論理学』194節の口頭説明で「最初たんに主観的である觀念は、外的な材料または素材を必要とすることなしに、それ自身の活動にしたがって、自己を客観化する objektivieren ようになる」と述べているように、「主観」は「自己を客観化する」のであり、主体はあくまでも主観である。

以上の『小論理学』概念論の「主観→客観→理念」の展開はわかるとしても、『大論理学』が客観的論理学（存在論、本質論）→主観的論理学（概念論）となっている順序とどう整合しているのか。また主観が「外的な材料または素材を必要とすることなく、その活動にしたがって、自己を客観化する」とはどういうこと

か。客観は機械的關係→化学的關係→目的的關係の順に発展するが、第三關係はなぜ「目的的關係 Teleologie」なのか。こういう論点がすぐ湧いてくる。大きく言えば、ヘーゲルの哲学全体における主観と客観はどう理解すべきなのか。問題は果てしなく大きくなる。課題を限定しなければ一歩も先に進めない。

本稿は、以上のような問題意識をもって、主として『小論理学』における「主観→客観→理念」論理を「客観→理念」の移行論理を中心に考察しようとするものである。(注1) (注2)

## 凡例

1. ヘーゲル『大論理学』は武市健人訳岩波書店版(1956—1961年上①、②巻、中巻、下巻、グロックナー版)により、その訳書の頁数は(上①〇〇頁)の形で示した。訳文の途中に [ ] で括ってある部分は山内の補訳である。
2. 『小論理学』の本文は山内訳大川書房版(2013年、ラッソン版)を、山内による下線部付きの補訳や丸カッコでのいいかえ注釈をふまえてそのまま採用した。ヘーゲルの本文はゴシック体で、山内の言い換えや補訳は明朝体で示した。注解や口頭説明は松村一人訳岩波文庫版(1951—52年)を採用した。頁数の表記が煩雑になるのをさけるため、引用文は『小論理学』は「節」で示した。
3. 『精神現象学』は榎山欽四郎訳・河出書房新社「世界の大思想」版(1973年、ラッソン版)によった。「榎山訳〇〇頁」のように表記した。
4. マルクスとエンゲルスの著作は Diets—Werke 版・大月版全集訳・原頁に基本的によった。
5. 利用した訳書の一部には山内が独自に訳した箇所がある。
6. 引用文で特に注意を要する箇所は網掛けとした。

## 1. ヘーゲル体系における主観→客観→理念

まず『精神現象学』(1807年)と『大論理学』(1812-6年)の關係である。ヘーゲルはその体系的公刊の歩みを『精神現象学』(1807)で始めた。「学の体系第一部」との副題をもち、最初に刷られた本の1頁目には「意識の経験の学」という別題もあった。そこでは人間の魂は感覺的確信からはじまり、感覺的確信→意識→自己意識→理性→精神→宗教と大きく流れる。行き着く果ては、対象と自己との同一性を達成する「絶対知」であり、そこで人間は自由と自立を確定する。そこに至る全行程は「意識」から始まる点で主観を主体とする哲学であるのは明白だ。それも主観的個人の「感覺的確信」から出発する。この主観的個人の認識の旅は途上で客観性や社会性を獲得して主人公(主観性)もまた成長していく。しかし『精神現象学』はあくまで

も「意識」の経験の旅であり、完結しても「学の体系の第一部」の旅でしかない。

では意識の旅のたどり着いた「絶対知」とは何か。ヘーゲルではそれは精神と宗教(芸術)の総括であるが、『精神現象学』の次の箇所がまとめとしてふさわしい。

「精神のこの最後の形態は絶対知である。それは自らの完全で真なる内容に、同時に自己という形式を与え、このことによって、その概念を実現すると共に、かく実現することにおいて自らを知る精神である。言い換えれば、概念把握する知 das begreifende Wissen である。」(榎山訳、446頁)

意識の旅の行き着いた「絶対知=概念把握する知」の世界が「学の体系の第二部」になる。事実ヘーゲルは『精神現象学』出版と同時に広告文を出し、自らコピーを書いたと思われるが、そこには学の体系の第二部として「思弁の哲学の体系としての論理学と哲学の残りの二部門、すなわち自然の学と精神の学」を予定してあるとしている。『精神現象学』が到達した「概念把握する知」、すなわち概念の自己展開を追う「思弁哲学の体系としての論理学」、つまり概念弁証法が次の課題となる。そしてそれは、主観的哲学が an sich の哲学なら、それに対立した für sich の哲学、すべての事物に当てはまる客観の哲学となる。そして実際1812年に『大論理学』第一部「存在論」を出版したが、「本質論」をふくめ「客観的論理学」の括りであった。

『大論理学』の「初版序文」では『精神現象学』と『大論理学』との關係を次のように再確認している。

「このような精神の運動、すなわち自分の単純性の中に規定性を産み出すとともに、この規定性の中に自分自身との同等性を生ずるものであり、その点で概念の内在的發展であるところの精神の運動こそ、認識の絶対的方法であると同時に、また内容そのものの内在的魂である。——こういう自身を構成する道程においてのみ、哲学が客観的、論証的な学でありうる、というのが私の主張である。——『精神現象学』のなかでは、このいう仕方で意識を叙述することが問題であった。意識とは、具体的な、しかも外面性の中に囚われているところの意識としての精神である。しかし、この対象の進展運動は、あらゆる自然的、ならびに精神的生命の進展と同様に、まったく純粹本質性の本性に基づくものである。ところでこの純粹本質性こそ論理学の内容をなすものである。……その純粹本質性の自己運動こそ、その精神的生命であり、これがすなわち論理学を構成するものなのである。つまり論理学とは、この精神的生命の叙述にほかならない。」(上①5-6頁)

上記で論理学(存在論)は「客観的、論証的な学」であることが明言されている。

『大論理学』の「序論」では『精神現象学』と『大論理学』との関係を次のように言う。

「私は『精神現象学』の中で、意識がその対象との最初の直接的対立 [=感覚的確信] から出発して絶対知に至るまでの進展運動を叙述した、この道程は意識のその客体に対する関係のあらゆる形式を通過して、その最後に至って学の概念を獲得する。それ故に、この概念は（それが論理学そのものの内部で現れてくるということの問題外とすれば）、すでに『精神現象学』の中でその権利付けを獲得しているものであるから、今ここで改めてその権利付けをやる必要はない。またそこでは意識自身の各形態はすべて、その真理としてのこの [大論理での] 概念の中に解消してしまうのであるが、この概念はこのような意識を通じて産出されるというより以外の仕方での権利付けを与えられることは不可能である。」(上①32-3頁)

以上の三つの文章から『精神現象学』と『大論理学』の関係を次のようにまとめることができよう。

『精神現象学』が「感覚的確信」から「絶対知」まで至る「意識」の旅を追ったものであるとすると、『大論理学』は「存在」から出発して「絶対理念」に至る「概念」の旅を追ったものである。意識という主観的なものが到達した「概念把握する知」=論理学でいえば「概念」を武器にして、今度は「概念」が別のルートで世界把握の旅を始める。この場合「概念」は意識（主観）に対立させて大きくは客観という扱いになる（同趣旨のことが『小論理学』25節注釈にある）。『大論理学』引用文にある「意識自身の各形態はすべて、その真理としてのこの概念の中に解消してしまう」とはそういう意味である。ヘーゲルでは『精神現象学』（1807年）が「真理」であるかどうかは「意識」とは独立な「概念」を扱う『大論理学』（1816年）で証明されることになる。大小『論理学』が真理であるかどうかは『自然哲学』を経た『精神哲学』で明らかになる。真理は一つ後で証明される。『資本論』流に言えば、商品の真理は貨幣で、貨幣の真理は資本を論じて十全になるように、ある概念の真理性はより進んだ概念に行ってはじめて証明される。だから、商品を論じるときは商品が貨幣に転化することを念頭において規定・叙述することになり、貨幣を論じるときは貨幣が資本に転化することを意識して規定・叙述される。後続の概念を想定して先行の概念を規定し叙述する。「あとから post festum 始まるのであり、したがって発展過程の既成の諸結果から始まる」、つまり「追思考 Nachdenken」（『資本論』第一部、Werke 版 89 頁）の過程をたどる。同様に体系的な哲学では、先行する哲学体系・概念・対象はより複雑な次の哲学体系・概念・対象を論じてはじめて真理であることが証明されるのである（だか

ら『論理学』が真理であるのは『自然哲学』や『精神哲学』を展開して後はじめてということになる)。そしてそもそも Nachdenken はヘーゲルの概念なのである（『小論理学』26節）(注3)。

そのヘーゲル論理学の推進主体である「概念」は存在→本質→概念の形をとる。存在論は事物の単一的・直接的な考察領域での「概念」であり、本質論は事物の自分の外観を含め他者との関係性領域の「概念」である。だから「存在」も実は「概念」、「本質」も「概念」なのである。しかし、存在論では事物の関係性や自己発展性は一貫して捨象され、本質論では存在論の諸規定は前提にされたうえで捨象される。事物の発展性は依然として捨象されている。そういう形で論理展開されている。存在論と本質論はあわせて「客観的論理学」である。その存在と本質の統一、すなわち事物の直接性と関係性の統一が第3部「概念」として展開されるが、それは「自己みずからに還帰しまったく自己のもとにある思考」（『小論理学』83節）であり、客観的論理学に対立した「主観的論理学」の性格を持つ。そこでは事物の自己発展の論理が解明される。その「概念」はより細かくは「主観性→客観性→理念」（『大論理学』の表題）のトリアーデ構造をとりつつ、その理念も細かくは「生命→認識の理念→絶対理念」（同上）のトリアーデ構造をとる。こうして論理学は「絶対理念」にいたってその旅を終える。

『大論理学』を書き終わると、しかし、以前の哲学体系第一部精神現象学、第二部論理学・自然哲学・精神哲学とし、「論理学は精神現象学の最初の続巻」という立場はそのままでは維持できなくなる。『大論理学』では存在論と本質論は「客観的論理学」で概念論は「主観的論理学」であり、『精神現象学』の主観的哲学→客観的論理学→主観的論理学となり、大きくは主観に始まり主観に終わる自己完結の哲学体系になる。それでは自然哲学・精神哲学は主観的哲学の「応用」とするしなくなってくる。『大論理学』の到達した帰結ではそれらは主客統一の「理念」の「展開」でなければならない。そこで『大論理学』公刊後すぐに哲学体系が構築し直されることになる。それが『エンチクロペディ』（1817年）である。（ベルリン大学教授就任に哲学概論を出版しておくという世俗的必要もあったと思われる。）『大論理学』の内容が縮約され第一篇『小論理学』となり、『大論理学』にはあった「客観的論理学」と「主観的論理学」の表題は削除された。そして『小論理学』は、すでに理念にまで到達しているので「即自かつ向自的な an und für sich 理念の学」として位置づけられ、同時にそれが体系の出発点とされた。第二篇は論理学の対立物であるから「本来の姿を失った理念の学」としての『自然哲学』である。第三篇は第

一篇と第二篇を統一した「自己喪失から自己のうちに還る理念の学」としての『精神哲学』となった。かつての哲学体系の第一部『精神現象学』の内容は「精神哲学」の第一部「主観的精神」(A・B・C項)の全項に分けて位置づけられ、特に「意識→自己意識→理性」の論理的展開はB項「精神現象学」に縮約された(『エンチクロペディ』=『小論理学』18節)。哲学は世界把握の全面的な学問となり、それは「理念」に始まり「精神」で終わることになる。

「精神」はヘーゲルの『精神現象学』と『論理学』とが、それぞれに主観的にあるいは客観的にたどったコースを今度は両者を統一しながら自分の生い立ちを確認する旅を開始する。到達点である「絶対的精神」から見れば、大きくは三段階の旅である。①最初に主体である「意識」は、主観的に・最終の『精神哲学』の立場からは an sich に・『精神現象学』の旅を行い「絶対知」=概念に行き着く。→②「意識」に代わって主体になった「概念」は客観的に・最終の『精神哲学』の立場からは für sich に・『大論理学』(または『小論理学』)の旅を行い「(絶対)理念」に行き着く。→③最後に「概念」に代わって主体になった「理念」は、『自然哲学』で「本来の姿を失った理念の学」(『エンチクロペディ』=『小論理学』18節)という隠蔽過程を経て、絶対的に・最終の『精神哲学』のたちばからは an und für sich に・『精神哲学』の旅を行い「主観的精神→客観的精神」を統一し、「絶対的精神」にたどり着く。そしてその「絶対的精神」の終点は「哲学」である。だから大きくは出発点に還帰し、哲学体系として完成するのである。総括すれば、ヘーゲル哲学とは、主体である絶対的精神が「意識→概念→理念→精神」(自然は理念の疎外態)という順番で、より高度な形態をとりながらそれぞれの段階で主観と客観の世界を統一して絶対知・絶対理念・絶対的精神として自己を総括する、その全過程を追ったものということになる。1807年の『精神現象学』当時の哲学体系は、『大論理学』の執筆終了で変更を余儀なくされたが、直後に『エンチクロペディ』(1817年初版、全三篇)という哲学体系に仕上げたことで『精神現象学』は『エンチクロペディ』の前提となるものとして、ヘーゲル体系のなかで「主観的精神」として再度位置づけられた。また、『大論理学』にあった客観的論理学→主観的論理学という位置づけも、『エンチクロペディ』=『小論理学』では表題としては削除されたが、体系的・内容的に矛盾なく維持されることになった。ヘーゲルは後に『法の哲学』(1821年)を公刊することで『エンチクロペディ』の中で手薄だった「客観的精神」を完成させた。ヘーゲルは生涯かかって哲学体系をきちんと完成させ、公刊した。人類の偉業である。

## 2. 客観的論理学と主観的論理学

次の問題は、『大論理学』にはあり『小論理学』では表題としてはなくなった「客観的論理学」と「主観的論理学」との関係である。この問題は当然『精神現象学』と関わる。以下『精神現象学』の初発の箇所論理を見てみる。

ヘーゲルでは人間の「感覚的確信」・「意識」・「認識」のようにもっぱら人間にだけ当てはまるものが主観で、人間も含めあらゆる事物に当てはまる「概念」のようなものが客観である。概念で説明できる自然や社会も当然客観ということになる。だから『精神現象学』は主観的哲学、『大論理学』や『小論理学』を含む『エンチクロペディ』および『法の哲学』は大きくは客観的哲学ということになる。では、「意識」はつねに主観的で、「概念」はつねに客観的かということ、ヘーゲルではそうではない。意識も概念もそれ自体、対立物を取りこんで無限に成長していくものであるから、主観の成長を追う場合にも対象(=客観)との相互作用は必要であり、客観のより進んだ認識には主観的概念がその前に確立していることが必要である。強いて区別すれば、主観的哲学と客観的哲学といえるというだけでヘーゲルはむしろそういう区別立ては本意ではない。そうではなく「主客未分離→主客相互浸透→主客統一」の哲学がヘーゲル本来の枠組みである。「主客未分離」が体系の出発点であることは『精神現象学』の開始部分に現れている。

『精神現象学』では、意識の旅は「感覚的確信」から開始される。意識は最初感覚から直接体験されるから直接知であり、具体的で内容豊かなものであり、だから「真なるもの」と思われるが、実はそれは「思いこみ」にすぎない。感覚的確信とその対象(=事物 Sache)の関係の最初の関係にすでに矛盾が存在している。次は本論の「A意識」の出だし部分である。

「最初に、すなわち直接的に我々の unser 対象となる知は、それ自身直接知 unmittelbares Wissen、直接的なものまたは存在するものの知に他ならない。われわれ Wir もやはり直接的な、つまり受け入れる態度をとるべきであって、現れてくる知を少しも変えてはならないし、把握から概念的把握 Begreifen を引き離しておかなくてはならない。」(榎山訳、67頁)

自分の意識の対象はまず意識の活躍の余地がないまったく感覚的对象であり、自分の対象は意識とは無関係にそれ自体として客観的に存在しているものであり、したがって感覚的知は「直接知」=非媒介知でしかない。そのまま「把握」することしかできないものであ

り、そう「感覚的確信（＝思いこみ）」するしかないものである。その中身について冒頭第二段落で次のように言う。

「感覚的確信は、その具体的内容からみて、そのままでも最も豊かな認識であり……。この確信は、自らの知るものについて、『存在』ということだけしか言わない。その真理は事物 Sache の『存在』だけしか含んでいない。意識は意識なりに、この確信のなかにいるとき、『純粹自我（Ich 私）として存在するだけである。言い換えると『私』はそのでは純粹な『このものDieser』として存在するだけであり、対象 Gegenstand も純粹な『このものDieses』として存在するだけである。……自我も事物も、ここでは、多様な媒介という意味をもってはいない。そうではなく、事物は存在する。事物はただ存在するから存在する。事物が存在するという事は、感覚知にとり本質的なことである。この純粹存在もしくはこの単純な直接態が真理なのである。同じように、この確信は関係としても、直接的な純粹な関係である。意識は『自我』であって、それ以上の何ものでもなく、純粹な『このひとDieser』である。個別的なひとが純粹のこのもの、つまり『個別的なものdas Einzelne』を知るのである。」（同、67-8頁）。

最初の「感覚的確信」はそれ自体矛盾をもつ。「最も豊かな認識」であるはずなのに、実際は「自我（私）」が自分も含め「事物は存在する」ことがわかるだけである。しかもただ個別な人が個別なものが「存在する」を受け止めるという形にすぎず、意識や思考の働きによる認識でも、対象の分析、吟味でも一切なく、当然主観や客観の区別もなにもない。いわば「主客の未分離状態」が「存在している」のである。（注4）しかし同時に、そこには「別の多くのこと」、すなわち次のような否定的な内容がある。

「……純粹存在には、『われわれ』から見ると、なお今言ったのとは別の多くのことがその傍らに戯れている。現実の感覚的確信はこのような純粹の直接態であるだけでなく、この直接態が傍らに戯れていること [= 多数存在していること] でもある。その際現れてくる無数の区別のなかには、どこにも主要な区別がある。つまり、そこには純粹存在から『自我』としての『この人』と対象としての『このもの』という、すでに前に言った二つの『これ』がすぐさまころがりてくる。……その一方も他方も、直接的な形でだけ、感覚的確信のなかに存在しているのではなく、同時に媒介されたものとして存在しているのである。自我は他方つまり事物を通じて確信を持ち、同じように事物も他方つまり自我を通じて確信しているのである。」（樫山訳 68頁）

あらゆる事物は、自我とか対象とかも含め、直接態

および媒介態として、すなわち対立物の統一として存在している。つまりヘーゲルでは「主客未分離」の状態が出发点なのだ。しかしそれは、それ自体矛盾をはらんだものだから運動せざるを得ない。その運動は最初の主客未分離状態を感覚し確信した意識を反省することから開始される。それは次の段階を経る。①対象こそが直接に個別的に存在する、とする立場を反省して、対象が個別性としてではなく普遍性として存在すると気づく段階。②「そこで消えてしまわないものは不変者としての自己である」（訳 70 頁）。先には、対象がどうであろうと、個別的な「私が見ていること」ということは確信を持って言えた。ここでは、それを反省し、個別的な自我のなかに普遍的な自我がいることに気づく。①と②をまとめると次のようになる。

「私は、このもの、ここ、いまもしくは『個別的なもの』と言っているとき、すべてのこのもの、ここ、いま、[すべての] 個別的なものを言っている。同じように、自我、この個別の自我と言うとき、私は普遍的にすべての自我を言っている。」（訳 71 頁）。

「こうして感覚的確信は、無関からの本質が対象のなかにも、自我のなかにもないことを経験し、直接態なるものが、対象の直接態でも自我の直接態でもないことを経験する。」（同上）

総括的に言えば、感覚的確信とは、個別的なものに普遍性を求めることなのだが、感覚的確信の本性である「このものと思ひこみ」があることによって、それには限界がある。だから感覚的確信は「真にあるとおりにとらえる wahrnehmen」を本義とする「知覚 Wahrnehmung」に発展することになる。

同様の論理を『精神現象学』は延々と積み重ねる。意識は他者との接触を経る経験の旅を積み重ね、事柄を深く認識するとともに、意識の方も意識→自己意識→理性と水準を上げていく。その旅は幾多の寄り道と挫折・後戻りをしながら「絶対知」に至るまで続けられる。意識の最初の「感覚的確信」にあっては、「このもの」・外的対象は意識からまったく独立したものと見なされる。自然現象の法則等を見出すのもこの段階である。客観に主観を合わせるといふ an sich の・認識段階の意識である。しかし、意識は今度は外的対象ではなく自分自身を対象にして、自立性と自由を実現しようとする。「自己意識」である。その立場で他者や自然等の外的対象に関わろうとする。主観に合わせて客観を変えようとする für sich の・実践段階の意識である。意識の最後の段階は「理性」で、それは「意識」と「自己意識」を統一した、言い換えれば認識的意識と実践的意識を統一した an und für sich 段階の意識である。具体的には社会制度という対象が自分の意識と深く結びついていることを洞察する。客観的对象の

なかに自己（主観）を見出そうとする。意識は「意識→自己意識→理性」という例のトリアーデ構造で成長していき、その理性も同様に「精神」→「宗教」→「絶対知」のトリアーデ構造の発展をとげる。

大小の『論理学』も論理展開は『精神現象学』と同じである（本稿では『小論理学』で考察する）。すべての事物の始元は「存在」であるが、中身のない抽象的な「純粹存在」である。始元の客観的な「存在」を「純粹存在」と規定するのは主観であるから、ヘーゲルの論理学は主客未分離の状態から開始されていると言ってよい。そこから始まるすべての事物において、「或るもの」が「他のもの」へ「移行」する論理が存在論、或るものの本質が自分の外観も含め他者で「反省・現象する」論理が本質論である。これは主観の助けを借りなくても展開できる客観的論理学である。第三部「概念論」はすべての事物の「発展」それも「自己発展」の論理を追うことが課題になる。概念はここでは「主体 Subjekt」になり、「主観的 subjektiv」論理学が開始される。「概念」はここでは高次の主客未分離として出発するが、まず「主観的概念」として分析され、その主観的概念の「実現」として「客観」が、さらに客観から主格一致の理念が発生することが展開される。概念は発生—発展—消滅・新生をとげる「生命」のようなものである。「概念はあらゆる生命の原理であり、したがって同時に絶対的に具体的なものである」（160節口頭説明）。だから論理学での「客観」（対象物、自然・社会）は、それ自身の哲学的把握が問題なのではなく、主観が客観でいかに実現されるか、主観と客観の対立がいかに克服されるかという観点でのみ、問題にされているだけなのである。次がそれを明白に示す。

「宗教および宗教的儀式の本質が主観と客観との対立を克服することにあるように、科学および哲学の任務も、この対立を思考によって克服することにある。一般に認識の目的は、われわれに対峙している客観世界からその未知性をはぎ取り、そのうちに自分自身を見出すことにある。自己を見出すことはすなわち、客観をわれわれの最も内的な自己である概念に還元することである。……最初たんに主観的である概念は、外的な材料または素材を必要とすることなしに、それ自身の活動にしたがって、自己を客観化するようになり、他方客観は硬直し、過程をもたないもの ein Starres und Prozeßlose ではなく、その過程は自己を同時に主観的なものとして示す過程であって、これが理念への進展をなしている。」（194節口頭説明）。

だからヘーゲルの概念論での「客観」はそれ自体に即した an sich の考察はなく、最初から主観的概念の「実現」という向自的 für sich な位置づけのものであ

り、最終的に「（絶対）理念」に到達するための途中の段階のものである。それは「推理」という主観的概念の最終の発達段階を前提にしているから、最初から三項関係をとっていることが自明なものである。けっして単独の対象物や二項関係の本質と現象（外観も含む）の形をとる物自体（およびその現象）ではない。したがって第三部概念論で取り扱われている「客観」は太陽—地球—月や、酸—アルカリ—中和物や、目的—手段—実現の関係のように、普遍・特殊・個別の三契機の「推理」で考察しなければ意味をもたないような客観「関係」であり、主観の側から言えば客観「観」なのである。概念論での「客観」は唯物論的解釈には合わないものである。主観との対立を強いて言うなら「客観的論理学」の存在論や本質論で考察済みのものである。そしてそれを主導するのは主客未分離状態にあつてまず確定された「主観的概念」なのである。

すでに『小論理学』第三部概念論の序論・160節で「概念」とは次のように、自由・自立的なものであると主観的にも客観的にも規定されていた。

概念は、「向自的に存在する für sich\* seiende」（存在論的には自立した自分と向き合うところの）、実体的な（本質論的には現実性として現れる力としての）、自由なもの das Freie（他のものによる外的必然性から開放されたもの）であり、存在と本質の対立を止揚した「全体性 Totalität」である。概念のうちではその諸契機（主観・客観・理念あるいは普遍・特殊・個別、さらには存在・本質・概念）のおのおのは、概念にふさわしくそれはそれで全体をなしており、概念の諸契機は主体である概念と不可分に一体のもの ungetrennte Einheit として定立されている。したがって、概念はその自己同一性 Identität を保ちつつ、「即自かつ向自的に定立されたもの」（対立物の統一で自立しているもの）である。

概念とは、形式論理学で言う「特殊な要素を取り除いてすべてに共通するもの」ではなく、「無限の形式、自由な創造活動であって、自己を実現するのに、自己の外に存在する素材を必要としないもの」（163節口頭）である。概念はこのように主観として開始されても、その「実現」に客観を必要とするもの、逆にその客観は「素材を必要としない」もの、普通に言う外的対象・「客観」ではないもの、つまり総括的には＜主客未分離のもの＞なのである。そういう「概念」の完成が「理念」である。したがって、概念論の中の「主観的概念」も「客観」も、「理念」を結果として前提にした思考＝「追思考 Nachdenken」したうえで、そこにたどり着くように叙述されているものとして理解する必要がある。

以上はヘーゲルの an sich-für sich-an und für sich 論理では次のようにまとめることができる。主客未分

離の中からまず「主観的概念」として把握された概念は客観的關係の中で「実現される」。しかしそれは客観一般ではなく、主観にたいしては für sich な、それでいて最終的には否定の否定で主観的に戻ってくるような・要するに an und für sich な「理念」の一步前の客観「関係」で実現されることになる。客観関係は「主観の実現」の度合いで、すなわち主観との関与や距離の度合いで、「機械的關係——化学的關係——目的的關係」の三者の形をとる。つまり「その直接態においては単に即自的な [=主観的な] 概念」(195 節)であり、いったん主観的意識により定立されれば、主観介入の余地が少ないものが機械的關係である。力学的關係が代表的である(太陽—地球—月の力学はヘーゲルなら最初は神の意志による設定で、あとは自己運動する力学というであろう)。他方、それに対立するものが、「[主観的] 概念の全体性が定立されたもの」(200 節)、すなわち意識が事物の固有の対立關係・内的本性を把握した上で意識的に定立する化学的關係である。中和・加水分解關係が代表的である。最後に目的・作業様式・対象・手段・方法・結果の定立で主観介入の余地が大きく、「向自的に [=自立して自由にふるまえる] 存在する [主観的] 概念」(204 節)が目的的關係である。労働過程が代表的である。そして「目的的關係は機械的關係と化学的關係の統一」(194 節口頭説明)である。言い換えれば、主観的概念の普遍・特殊・個別の三契機的關係が外的・直接的・ばらばらの寄せ集めのな、したがって主観的概念をあらゆる關係性が潜在的な・an sich なものが機械的關係となり、それと対立して、主観的概念の三契機が固有の・内的・必然的・全体で一つになろうとして顕在的な・für sich な關係にあるものが化学的關係として把握される。最後に化学的關係の否定(したがって機械的關係の否定の否定)による統一・「自己を自分自身とのみ連結し自己を保持する」(204 節)關係、すなわち三契機の推理關係が主観的概念そのものをあらゆるような・an und für sich な關係が目的的關係となる。これにより労働過程・生命過程に近づくことになる。客観關係は主客よそよそしいものから主客が一致する一步手前の關係へと発展するのである。

機械的關係と化学的關係はそれなりに理解しやすい。しかし、それらと並べられる目的的關係 Teleologie は「客観」としてわかりにくいので、項を改めて論ずることにする。

### 3. 目的的關係の定立による主客統一へ

哲学史では、自然の哲学的取扱いで、大きくはアリ

ストテレス的な目的原因説とデカルト的な機械説があった。目的原因説は、あらゆる客体的事物に、したがって無機の物体にも目的性を認め、石は地上世界で下に落ち、火は上にのぼるように固有の場所という目的をめざして運動するのだとする。デカルトはそれに対し、物体の現象はすべて力学的、機械的に説明でき、動物は一種の自動機械にすぎないとし、自然界の説明では目的論を否定している。ヘーゲルは、対象・客観を「概念の実現」(193 節)と見た点ではアリストテレス的であるが、客観は主観的概念の外的・他在的・疎外的表現の側面があるとした点でアリストテレスを超えている。他方ヘーゲルはすべての客観を機械的關係から派生させた点ではデカルト的であるが、機械的關係の最高の発展が目的的關係であるとした点でデカルトを超えている。ヘーゲルはアリストテレスとデカルトを統一しているとも言える。それを可能にしたのが、彼の機械的關係論である。ヘーゲルは機械的關係そのものの中に「形式的な」機械的關係(195 節)、「差異に基づいた」機械的關係(196 節)、さらに「絶対的な」機械的關係(197 節)の3段階があるとし、差異に基づいた機械的關係がのちに化学的關係に発展し、絶対的な機械的關係がのちに目的的關係に発展するとする。客観は主観的概念に対立して定立されたが、客観は客観として自己運動しているのである。向かう先は主客統一の一步前の「目的的關係」である。だから「目的的關係」は機械的關係と化学的關係という対立物の統一であるとともに、化学的關係そのものの発展でもあると位置づけられる。そう示したのが、移行規定の203 節である。

#### 203 節 (化学的關係から目的論的關係へ)

酸・塩基というような差異あるものの中和的なものへの還元 Reduktion、および「分化していないもの Indifferente」あるいは中和的なものの分化という上述の二つの過程は、相互に外的であって、それぞれ独立して現れるが、しかしそれは、二つの過程を止揚している産物へ移行することで二つの過程の有限性を示している。逆にこの過程は、化学的關係の特徴である分化された客観が前提していた直接性 (目の前の客観物の存在が真理であること) がむなししいものであることを表現している。

概念は、これまで機械的關係や化学的關係レベルの客観として、目に見える外面性および直接性のうちに沈められていたのであるが、今やそれらの否定によって、概念はそうした外面性および直接性にたいして自由かつ自立的なもの(もともと潜在していたものが顕在化すること)、すなわち「目的 Zweck」として定立されている。

ヘーゲルの論理学は概念の自己展開を追う弁証法で

あり、思考の力だけで外的対象、「客観」を説明せざるをえない。「外的な材料または素材を必要とすることなし」に「客観」を展開するのはヘーゲル論理学本来の要請なのである。しかし、203 節の移行論理は十分に説得的であるとはいえない。肝腎の化学的関係の中に目的的關係へ発展できる契機を説明できないからだ（この点『大論理学』も同じ）。ヘーゲルは明示していないが、次のように論理展開できないであろうか。以下は山内説である。

「概念」は存在と本質という客観的な段階を経て統一され、あらゆる事物の自己発展の主体 Subjekt になる。われわれの主観により、事物は普遍・特殊・個別の3契機に分解されたのち、2項関係の「判断」を経て、3項関係の「推理」で再構成される。それはわれわれの認識の世界、「主観的概念」である。というのは、対象物・「客観」がわれわれの意識の外で自らを普遍・特殊・個別に区分することもなければ、「推理」で再構成することもないからだ。だから、普遍・特殊・個別や判断・推理を客観に適用するのはわれわれ人間の「主観」である。しかし、概念はもともと主客未分離の性格を持ち、発展すれば主客統一の理念に成長するものであるから、「主観的概念」にとどまることはできない。「(主観的)概念の実現」、すなわち「客観」が必要になる。それも「外的な材料または素材を必要とすることなし」に行われなければならない。しかし、「主観的概念」から最初に移行する機械的關係は「主観的なものとしての概念を最初は自分の外に持ち、すべての規定性は外的に定立された規定性として存在する」(『小論理学』195 節)のであるから、主観の仕事はそういう機械的(=力学的)関係を思考対象として「定立」というだけにとどまり、その力学は主観の「外」であり、主観の実現にはならない。機械的關係がそれとは für sich な化学的關係に至っても基本的には同じである。酸とアルカリは物質同士が親和力を持ち、主観の助けを借りることなく中和・加水分解する。主観は力学に比べ高次な関係を定立する際必要だけで関係そのものの展開は主観介入の余地はない。だから主客統一のためには、上記の網掛け部分の反対の内容、すなわち「主観的なものとしての概念を自分の内に持つ」新しい関係が定立される必要がある。ところが化学的關係そのものには「概念を自分の内にもつ」関係は見出されない。それは現代の科学でも無機化学的關係から生命ある有機物へ推移することができないのと同じで、もともと無理なのである。だから、論理の飛躍なしにはできない。この点は『大論理学』も同様である(下 225 頁)。化学的關係自体に移行論理が見出せないヘーゲルは、そこで主体である「概念」そのものの別の性格にもどることになる。今まで追求してき

た「客観 Objekt」の概念が見直される。「概念は、これまで客観として外面性および直接性のうちに沈められていた」と文学的な表現になっているが、「沈められていた」=論理で無視されていたものは、「客観 Objekt」のもつ「目的 Objekt」という性格である。独語の Objekt は両義性をもつのである(英語の object もそうである)。機械的關係や化学的關係にもすでに、それを定立する際には認識するためとか、作用を期待するためとかの「目的」があった。今や主体である「主観的概念」は「客観 Objekt」で実現されるが、それは同時に「客観」がもつ「目的 Objekt」の性格を自己運動させたものであり、主観(目的の設定)→客観(目的の自己運動)→主観(目的の実現)となる。「客観(=目的)は今や「主観的なものと規定されている」。逆に主観的な「目的」概念は「自己を客観化[=自己を目的化]することによって、……自己を自分自身とのみ連結し自己を保持している」ことになる。つまり目的は「目的の実現」で自己に戻ってくる。ここでは Objekt のもつ客観・目的の両義性と客観・主観の両義性がうまく使われている。(注6)

以上の化学的關係から目的的關係への移行はヘーゲルもよほど困難だったらしく、『小論理学』203 節口頭説明では次のように補足している。「化学的關係から目的的關係への移行は、化学的關係の二つの形態[中和と加水分解]が相互に止揚し合うということのうちに含まれている。このことによって生じてくるものは、化学的關係および機械的關係においては即自的に an sich のみ存在している概念が自由になるということであり、かくして向自的に現出存在している für sich existierende 概念が目的 Zweck である。」ヘーゲルは Objekt の「客観」と「目的」の両義性を論理に持ち込みながら、口頭説明でそれへの言及はない。そして「目的」としては用語 Zweck を使い続けることになる。

#### 4. 目的的關係は「理性の狡知」の労働過程

ヘーゲルは「客観 Objekt」概念が潜在的にもつ「目的 Objekt」という主観的性格に強調点を移すことによって、客観關係の第二の化学的關係から第三の目的的關係を引き出し、「[主観的]概念が実現される」とした。概念が「主観性の他者」、すなわち客観=目的になり、そして客観になることが「自己を自分自身とのみ連結し、自己を保持する」と位置づけている。『大論理学』の目的的關係論は「主観的目的—手段—実現された目的」の項目立てであるが、「目的は客観の中で自分自身[=目的の実現——山内]に到達した概念である」(下 237 頁)と総括的規定がある。だから、ヘーゲル



の目的的關係は主観的である「目的」概念が客観的な対象・手段を駆使して、「実現された目的」すなわち実現された「主観」になることである。同時にそれは Objekt（客観＝目的）の実現でもある。こうして客観論レベルで主観と客観の統一を完成するという構造になる（本当の主客の統一は理念論で行われる）。客観 Objekt（＝目的）は主観的「目的」実現の道具であり成果である。『小論理学』では 208 節で主観的目的の実現過程＝合目的な活動が「内的な力」であることをふれた後に、それを 209 節では「理性の狡知」と名付ける。

209 節（合目的活動の「理性の狡智」）

（3）**手段を用いての合目的活動**（客観に働きかける主観）はまだ外に向かっている。なぜなら、この場合**目的はまだ客観**（たとえば労働対象）と一体化されている *identisch* のではなく、したがってこれから客観（労働対象）へ媒介されなければならないからである。手段（労働手段）は客観であるから、この**第二の前提**（労働対象）のうちで、推理のもう一つの両極項、すなわち前提されたものとしての客観性、つまり材料（労働対象）と直接に関係している。この関係は「目的」に奉仕している**目的・手段・材料という客観の機械的關係および化学的關係の領域であって、目的がこれらの関係の真理および「自由な」**（客観に束縛されない）概念である。主観的目的 *Zweck* は、客観的なものがそのうちで相互に摩滅しあう止揚しあう諸過程を支配する力として、自分自身はそうした過程の外にありながらしかもそのうちで自己を保持している。これが**理性 Vernunft の狡智**である。

「理性の狡智」とは、主観的目的が労働過程で諸客観（労働力、労働手段、労働対象）を酷使しながら、自分は手を下さないで自分の目的を実現する「神の摂理」（口頭説明）のようなものである。労働はここでは有用労働であり、自己労働でも他人の労働でもよい。人間は、有用物を作るという目的のもと、作業様式を考え、どこで労働を終えるかまで見通して（目的的關係）、労働手段を駆使し（機械的關係）、労働対象の性質を利用して有用物に加工する（化学的關係）。上記引用の網掛け部分にあるように、目的（主観）はその目的実現のために、労働対象や労働手段を選択し作りかえることもできるから、「自由」の過程である。主客統一の到達点は「自由」でなければならない、というのはヘーゲルの一貫した思想である。ヘーゲルはこれを「理性の狡知」とよぶが、それは「神の摂理」の一つ前のものだからであろう。

主観（目的）が Objekt（客観＝目的）を取り込む「理性の狡知」が実現され、客観的關係が完成を見たからといって、主客統一がすべて完成されたわけではない。

目的的關係には「有限な合目的性」（208 節注解）という固有の有限性がある。そのため、「達成された目的は一つの客観にすぎず、それはまた再び他の目的に対する手段あるいは材料になる。こうした関係は無限に続いていく」（211 節）。目的達成といっても「仮象」や「錯覚」があるかも知れない。目的の実現が新たな主客矛盾の要因にもなりうる。こうしても「主観的目的——手段——実現された目的」の關係は裏面に「錯覚——矛盾——克服」の過程を含むものになり、主客の真の統一をめざして次なる「理念」が考察されることになる。

おわりに

『大論理学』第三部「主観的論理学または概念論」の「著者の序言」に、（1816 年）に「概念の論理学にとっては〔存在論や本質論とちがひ〕完全に出来上がってしまつて固定した、化石したともいうべき材料が存在しており、したがって課題はこのような材料を流動的なものとし、このような死んだ素材のなかに生きた概念を再び点火するにある」（下 8 頁）とある。もちろんこれは形式論理学でがんじがらめになった「概念」を独自に展開する困難を言ったものである。しかし、「外的な材料または素材を必要とすることなく」主観の客観化をなしとげたヘーゲルにとっては、「死んだ材料」を主観的概念で「再び点火して」蘇生させたともいえる。（ヘーゲルの「客観」は死んだ材料だけでなく生きた外的対象をも含んでいるのではあるが。）

とまれ、ヘーゲルは彼の哲学で最も困難な「主観的概念→客観→理念（主客統一）」の移行の壁を Objekt の両義性（客観と目的）を使うことで乗り切ったといえる。

（注 1）ヘーゲルの「主観 Subjekt——客観 Objekt」は「主体——客体」と訳した方がよい場合もある。また「主体——客観」というふうに、普通には対にならないが、そう理解したほうがよい場合がある。『小論理学』概念論には時々ある。しかし、『大論理学』第三部の「著者の序言」でいうように、概念の論理学は従来の形而上学や形式論理学で古くからの「概念＝カテゴリー」ができあがっていて、種々のニュアンスの「主観——客観」の用法も無視することはできない。それで訳文では「主観——客観」で一貫させることにする。

（注 2）『エンチクロペディ』＝『小論理学』41 節の口頭説明にカントを批判する際の「客観性」の三つの意味の説明がある。①外的存在、②カントの物自体、③「観念された即自 *Ansich*」である。③は舌足らずの表現あるいは受講者の中途半端な口頭説明の筆記のように思われるので、今回③を採用することは避けた。

(注3) Nachdenken に関しては、松村一人『小論理学』上巻、26 節 (岩波文庫、1951 年) の「訳者註」、許萬元『認識論としての弁証法』青木書店、1978 年 が代表的考察である。以下両説の検討では Nachdenken の訳がちがうので、混乱をさけるため原語で使用する。

松村は Nachdenken を「追思惟」と訳し、「なんらかの思想の歩みを追うこと」であるとする。中身としては「ヘーゲルは客観を思想がつかぬいてみるとみるから、その思惟的認識は追思惟となる。さらに、ヘーゲルによれば真実在である論理を思考において追求するときも、それは実在としての純粋な思想を主観的思惟によって追思惟することになる。この後の二つの意味における追思惟とは、だから、思惟のヘーゲルの解釈と不可分である」(岩波文庫版、132-3 頁)。私がつけた松村の下線部は私の言葉では「概念の歩みを主観的思考によって Nachdenken する」と読めるが、むしろ逆であろう。『精神現象学』で主観的意識が到達した概念を使って、大小『論理学』が概念の旅として仕上げられているのであって、松村の言葉は「主観的思惟を実在としての純粋な思想 (= 概念) によって追思惟する」としなければならぬであろう。しかし、ここが主要問題ではない。Nachdenken はヘーゲルの体系に関わる用語であるからである。

許萬元にあつては Nachdenken とは「即かつ対自的考察法」(同、214 頁)、すなわち「発展の結果であるものをあらかじめ前提として考察する」(前掲書、218 頁) 方法、言い換えれば「諸規定の導出の必然性を保障する思考」(同、223 頁) であること、そしてそれはヘーゲルの「真理 (真の概念)」(同、222 頁) 観、すなわち先行する概念の真理性は後続する概念により証明されるとする観点とほぼ同義である、とする。本稿も基本的には許説を学んでいる。私の言葉で言うと Nachdenken は次のようになる。Nachdenken とは、あらゆる考察対象をつねに二つの契機とその統一物という三つにわけて考察する方法である。すなわち、事物を最初から両契機の統一物と 3 段階にわけて把握し、まず両契機の同一と区別を指摘して、次に両者を対立物の統一として把握する。つまり事物をつねに an sich-für sich-an und für sich のトリアーデ構造になるように再編する。そしてそれを始元—進展—終局の形に大きく整理する。始元は an sich なものにし、それ自体から für sich を展開し、an sich→für sich→an und für sich になるように終局を叙述していく。Nachdenken とはそのような方法論の集約的表現である。論理学でいえば、「成」を最初から念頭において、その要素として「純粋存在」と「無」をまず設定する。そのうえで「純粋存在」から「無」を引き出し、「無」は「純粋存在」と同一であり、逆に「無」に至って「純粋存在」の証明が行われるとする。次に「無」に存在する否定性により、「無」から「純粋存在」の方に引き戻されるが、それでは「純粋存在 ⇄ 無」の悪無限におちいるので、その統一は「純粋存在 ⇄ 無」より一段高いところから、すなわち純粋存在と無との同一性と区別をともにもつ「成」に戻るように行われる。ヘーゲルはこれを「純粋存在」と「無」

の「真理」は「成」で行われるという。そして、全体を発展的に「純粋存在→無→成」の形で叙述する。これにより「成」は消滅 (純粋存在→無) と生成 (無→純粋存在) という矛盾を最初からはらんだ運動として把握される。「成=変化」の矛盾は「変化」のなかで否定的に止揚され、次に静止した・規定された存在 = 「定存在」になる。だから全体は「純粋存在→無→(成)→定存在→……」の進行になる。これと同様の思考方法・叙述方法を大項目でも小項目でもすべての概念にわたって行うから、どんな概念も、中間的概念であろうとも、それが今まで経過したすべての概念を保存しつつ否定したものにになる。これが最の「理念」概念まで続けられる。許は Nachdenken を「結果論的思考」と訳そうとしたとあるが (前掲書、207 頁)、私は「終局を見据えた思考」と訳したいところである。なお、Nachdenken における許説と自説との「für uns」の扱いのちがいについては本紀要 2013 年第 48 号の「ヘーゲルの『即自——向自——即自かつ向自』論理」を参照。

(注4) 『精神現象学』本文の冒頭を「主客未分離」状態ととらえる点では西研の「意識」の解説と基本的に同じである。竹田青嗣、西研著『完全解説 ヘーゲル「精神現象学」』講談社選書・メチエ、2007 年。

(注5) 論理学における「客観 (性)」論が具体的に展開されたものが『自然哲学』である。そこでは自然的事物を大きく、機械的・力学的なもの、物理的・無機化学的のもの、有機的・動植物的なものに分類している。人間以外の動植物でも機械的関係・化学的関係のほか最低でも自己維持と種属維持という目的的關係を持っているとする (『エンチクロペディ』 = 『自然哲学』360 節)。

(注6) ヘーゲルは論理展開の際、哲学タームの元になった日常用語の含意や語源を利用する場合がよくある。sein—war—gewesen の活用から Sein (存在) と Wesen (本質) との関係を引き出した (『小論理学』112 節口頭説明)。また「判断 Urteil」はドイツ語の Ur-teil (原始—分割) の含意を利用している (『小論理学』116 節注解)。